

賛助会員訪問記

日本放送協会 放送技術研究所 訪問
(ホームページ：<http://www.nhk.or.jp/str/>)

平成 26 年 12 月 12 日 (金) 14 時 00 分～15 時 30 分、日本放送協会 放送技術研究所 (東京都世田谷区) を、高野良紀総務理事、押木満雅事務局長および齋藤渚事務局職員の三名で訪問した。研究企画部 藤井亜里砂副部長、立体映像研究部 久我 淳上級研究員、新機能デバイス研究部 宮下英一上級研究員および NHK エンジニアリングシステム先端開発研究部 宮本泰敬チーフエンジニアに対応していただいた。

受け付けを済ませて、待っている間にホールにある 8K スーパーハイビジョンの大画面モニターを見てその迫力に圧倒されているところ、藤井氏の案内で映画館の様なシアターに案内された。大画面の最前列中央座席に座り、8K スーパーハイビジョンを体験させていただいた。視野全体に広がる精細な画像と体が揺り動かされる様な音響効果に驚き、興奮と船酔いの様な浮揚感が残った。8K スーパーハイビジョンは、現行のハイビジョン画質の 16 倍の画素数を持つ超高精細映像と、22.2 チャンネルの三次元音響とを合わせたものであり、2018 年に実用放送を開始し、2020 年の東京オリンピックの年には本格普及を目指しているとの説明があった。

次に久我氏より会議室にて技術的な説明をいただいた。放送技術研究所はラジオ放送が始まった 5 年後の 1930 年に設立され、現在約 250 名の研究者が放送技術全般にわたる研究・開発を基礎から応用まで一貫して取り組んでいる。設立当初の録音技術から今日のハイビジョンの研究変遷と眼鏡無し立体テレビを目指した立体ホログラフィー用スピン注入型空間光変調器の説明を頂いた。次に 宮下氏、宮本氏より 8K スーパーハイビジョン用記録装置開発の現状を説明頂いた。大容量データの保存・高速転送を目指して、固体メモリ、磁性細線メモリや高速高密度ホログラムメモリなどの研究を進めているとの説明の後、実験室で 2 台の HDD を使って転送レートを一定にした試作装置で、非圧縮ハイビジョン映像の再生デモを見学させていただいた。訪問する前には、技術研究所では番組を放送する技術の研究を行っているとの漠然としたイメージだったが、スピンや情報記録など基本的な領域も研究を進めており、放送に関する領域を総合的に研究している。8K スーパーハイビジョン技術は、世界に先駆けて開発され、現在ではグローバルスタンダードとなっているとの事などをおうかがいし、頼もしい気持ちが湧いた。

最後に NHK がいくら高品質な放送を送信しても、受信する側が低レベルの受信機であれば努力が報われませんが、どの様に考えますかと質問すると、高品質の放送を行うことにより放送関連の装置メーカーが発奮することによって、廉価で高品質放送が受信可能な装置が普及し、日本企業の隆盛と視聴者の皆さんの生活がより豊かになればとの思いで研究開発を続けているとの答えをいただき、公共放送の役割を果たそうという研究者の心意気を感じた。
(押木 記)



放送技術研究所



取材風景



実験室